

「いろくみ」を使った配色造形教育の提案

irokumi - Proposal of color and figurative education

小倉ひろみ Hiromi Ogura 株式会社スタジオピーパ Studio PIPA Co.,Ltd
西出 綾子 Ayako Nishide 株式会社スタジオピーパ Studio PIPA Co.,Ltd

Keywords: 色彩教育, 配色調和, 教育ツール, 造形力, 想像力.

1. はじめに

昨年考案した「いろくみあそび」のためのカードセット「いろくみ」を用いた、配色と造形をあそびながら学ぶ教育方法を提案したい。

2. いろくみの概要と特徴

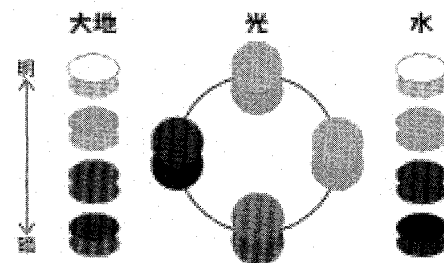
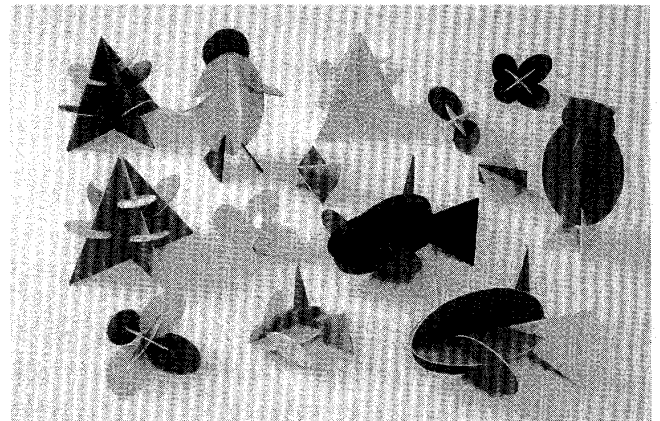
「いろくみ」は、配色や造形を苦手を感じる大人や子供に、美しい配色や造形が簡単に作りだせる状態になっている色と形のカードを使うことによって、色使いと造形力に自信をつけ、表現力や想像力を養うために考案した。

その特徴は1) 楽しみながら美しい配色が簡単に作れる、2) 作品をオブジェとして鑑賞できる、3) 作るたびに違う配色や造形ができる、4) はさみや糊を使わず作業できる、5) 収納がコンパクトだが大きい作品ができる、6) 手触りの良い紙製である(耐久性のある板紙の表裏に色紙を合紙した専用厚紙)、7) 4種の幾何形態: 丸・三角・四角・楕円である、8) カード中央にあるカーブスリットでくむ(スリット同士に相互を差し込んで組みあがるほか、スリットのないところにもスリットがカーブしているので自由に差し込め、絵を描くような自由さで立体をくみ上げられる)、等である。

3. 色の特徴

最大の特徴であり魅力はその色にある。いろくみには3つの色テーマ「光」「水」「大地」がある。光は赤黄緑青の4原色、水は表が白から黒までの、裏が青の4明暗段階、大地は表裏ともに暖色の4明暗段階になっている。これは必要最低限で十分な配色表現ができる数として、基準である色相を4色にしたため、明度も寒暖それぞれ4段で統一したことによる。なをカードの表裏で色が違うので全24色になる。さらにお互いの色を美しく響

かせるために、色同士の等歩度性と明度による調和を意識して24色を選出した。よって利用者がどの色カードで組んでも、美しい配色になる。しかし既存色から選ばざるを得ないため、大地に使用した色の明暗差が少ないのが残念である。



4. 遊び方/指導方法

いろくみは個人で遊ぶ以外に、共同で大きい作品を作りあげたり、お互いの作品を見比べることで、配色感覚が磨かれる効果が期待できる。大勢で同時に造形をすると、同じ形でも色をかえると季節や表情がかわることを発見でき、お互いに作品の色使いや形の感想を述べ合うことで、想像力が鍛えられ、さらにコミュニケーション力も鍛えることができる。これまでに2010年6月に青山学院大学学部生約70名、12月オゾン親子ワークショップ10組25名、2011年1月街路樹親子ワークショップ7組15名をおこなった。(次頁写真)以下に授業やワークショップから得た指導の要点を紹介する。



上左：幼稚園児、上右左下：小学3年生、下右：大学生

4-a 幼児～小学校低学年＆親子向けの指導

「カードを組まず平面上にレイアウトして遊ぶ」遊んでいるうちに美しい響き合いの色を記憶し、それが積み重なることで、他のことでの色づかいがよくなることが期待できる。平面から立体への思考が一般的にはまだスムーズにできない段階なので、クレヨン等を使って遊ぶより簡単に絵がつけれる。ただし1月の展示会では幼稚園児が立体をくみ上げた。(写真左上) また購入者によると2歳でパンフレットの写真を見ながらひとりで魚を組み立てた幼児がいるとの報告を受けている。幼児によっては組みあそびが出来る。

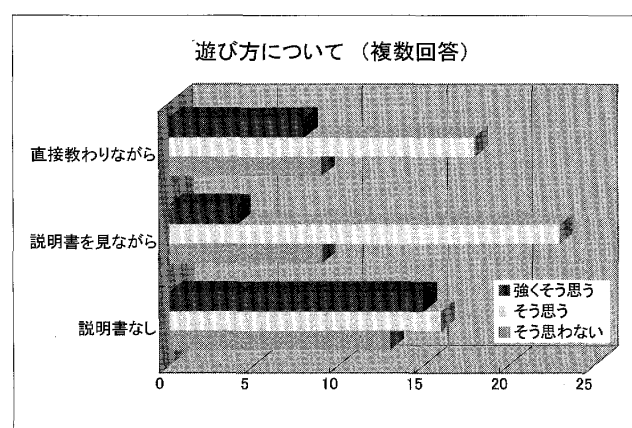
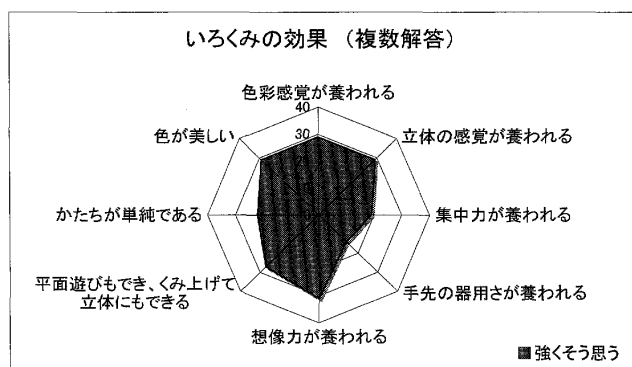
4-b 小学校中学年～高学年向けの指導

「カード同士を直交させると立つことを中心に教える」平面から立体の形に意識を向ける学習がちょうど5年生で行われることから、その概念を助けることが期待できる。明度による色調和を解説した後、さかな等の作例を提示し、どの色と形のカードを使って作られているかを観察させながら各自に同じものを作らせる。これを3例程度行い、パーツの位置による動きで表情のちがいを、配色違いで季節や感情のちがいを習得させる。そうするうちに、自由な発想力や想像力があふれるようになってくるので、その後は自由に作らせると夢中になって作業する。その後他者の作品を鑑賞させ、それぞれ異なる配色や造形表現があることに気づかせ、表現の多様性を実感させる。

4-c 大学生～大人向けの指導

「配色造形センスアップと同時に、想像力やコミュニケーションスキルをのばす」色彩論を教えた後、個々に作品制作させ、お互いに提示し合い何に見えるかを言い合う。するとたいていの場合自分が思っていたことと違う感想となり、答えがひ

とつではない、相手と自分は違う、ということを手自然に気づかせることができる。さらに10人程度のグループでフルセット216ピース全てを使い1つのオブジェを作らせると、組み方を相談してゆくうちに共同作業が自然に行われる。短時間で良好なコミュニケーションを築ける。



5. アンケートによる客観的評価

1月に展示会場で40名の来場者にアンケートをとり客観的な判断をあおいた。その結果75%の方より、色が美しい／色彩感覚が養われる／立体の感覚が養われる／想像力が養われるとの効果がある旨解答いただいた。また遊び方に関しては、教わりたい＆説明書を見ながら遊びたいという意見が、自由に作りたいという意見をやや上回ったため、幼児および小学生向けにワークブックを作成した。

まとめ

色彩は形態をともなつて初めて、見てさわれるようになり、手で作りながら記憶したものこそ真の表現力になる。いろいろはその機会を提供できればと願う。昨年秋に活動を始めたばかりで事例が少なく、今後は指導者への指導要綱も作成したい。ご指摘、ご意見いただければ幸いです。

参考図書 1) La couleur 1989 Gallimard 社

2) SECRETS de la couleur 1996 Gallimard 社